

白川郷の産業

現在の白川村に該当する土地の 95%以上は山地で、米やその他の代表的な主食作物の栽培には適していません。村の人々は、伝統的に庄川峡の斜面で育てられる植物の栽培に頼った産業を中心に生計を立てていました。桑の葉は養蚕のために、ヨモギは火薬の主原料となる塩硝を生産するために収穫されました。また、村人たちは林業や、漆の原料となるウルシの樹液などの林業関連の産物の取引で生活していました。1898 年の記録では、白川から富山県へ販売された品物は主に生糸の類、次いで木材、穀物で、他の場所から大量に持ち込まれた品は米、綿織物、魚介類、塩、酒などであったことがわかります。白川の主産物であった塩硝の需要は、1880 年代後半に日本がチリから安価な代替品を輸入するようになってから激減しました。それにもかかわらず、1898 年の帳簿では取引の収支が黒字になっており、当時の白川郷が比較的繁栄していた地域であったことがわかります。